

①教育の責任

私は、幼稚園教諭、保育士養成における保健体育分野の科目を担当し、運動遊びや健康教育を展開する力の習得を目指している。また、高大連携事業として、高校生に対する高大接続に資する企画の立案、実施を担当している。特別研究においては、テーマ設定、方法の検討、結論の導き方を指導し、論理的に説明する能力を養うことができるように取り組んでいる。担当科目の多くは演習、実技形式であり、対象者が積極的に話し合い、実体験に基づき学びを深められるようにしている。

担当科目および講座等は以下の通りである。

「子どもの生活と運動遊びⅠ・Ⅱ」、「体育実技」、「体育講義」、「教職実践演習」、「保育と青森（健康）」、「保育実践と青森（健康）」、「特別研究」、「高大連記事業」。

②教育の理念

私は、保育に携わるものとしての専門的知識や技術を学ぶことにとどまらず、「自らの考えを発信し、他の意見を尊重し、良好、合目的な人間関係を作ることができる。」、「現象を理解するため、説明するために、学んだ知識を活用できる。」、「客観的、分析的視点を持ち、論理的根拠を持った仕事ができる。」といった視点から、保育の技能を高める努力ができる保育者に育ってほしいと考えている。

私は幼稚園から小学校低学年まで運動が苦手であり、運動会のかげっこでは次の組の1位と間違われるほどのビリで、友人との遊びで運動遊びになると逃げ出したくなる思いでいた。しかし、小学校高学年の時の担任の先生に出会い、その先生との会話が楽しく、また褒めてもらえることで先生についていきたいという思いが芽生え、体育や運動遊びを夢中で取り組んだ。その結果、6年生では100m走の選手となることになった。この経験は、学校体育において運動が上手になることだけを目的とするのではなく、子どもの気持ちが動くことによって、子どもは積極的に活動に取り組むようになり、その結果運動での成功体験を得て自信に繋がるという今の自分の授業に向かう考え方の基礎となった。また、サッカーのナショナルトレーニングセンターでのトレーニング指導の経験からは、テキストから得た専門知識やトレーニング技術は、そのまま誰にでも有効になるわけではなく、対象者のニーズや身体的・心理的状态によって取捨選択し工夫しなければ、成果をあげることはできないということを学んだ。

学校での学びは、ともすると暗記型、方法収集型になりがちであり、それが学びと解釈してしまうことが少なくない。しかしながら、保育者の仕事においては、覚えた知識や方法を目の前の子ども一人ひとりあるいはクラスの特徴に合わせて、取捨選択や工夫す

る技能が求められる。この技能を獲得することは、私自身の経験からも容易いことではないが、その技能が発揮され有効に働いたときに得られる子どもたちの成功体験や笑顔は、保育者自身の努力の結果得られる最高の成果となると考えている。この成果を目指して努力できる保育者を育てたい。

③教育の方法

・グループ活動を通じた学び

質の高い学びを得るためには、学生個人が努力するだけでなく、他者に対して自分の考えを発信し、他者の考えから学ぶことも有効である。さらに、学んだ内容を他者に説明するという出力の機会は、学びを解釈し定着させるために有効である。そこで、「ラーニング イン ティーチング」という手法を取り入れている。この方法は、授業で学んだ内容をグループの学生相手に説明する、つまり「教えることで学ぶ」というものである。相手に伝わるように説明するには、学習内容を理解するだけでなく相手に伝わるように言葉を選び教材を選び伝える必要がある。これは、保育者として、子ども、保護者、同僚とコミュニケーションを取る場面を想定して実施している。さらに、クラス全員の前に立ち、学習内容について説明するプレゼンテーションも行う。これにより、緊張感を伴って相手に伝わるように説明するという、より実践場面を想定した学びの機会とすることができる。

模擬保育の発表にあたっては、事前の計画、準備をするためにグループ内での話し合いを密に行う時間を設けている。ここでは、私自身もグループを回り学生の意見を聞き、議論の停滞を少なくするように努めている。

・視聴覚教材を用いた学び

子どもの運動遊びを展開するにあたり、個人差の大きい子どもの集団を相手に保育者の設定したねらいに向けた指導をすることになる。運動遊びの成否には個人差があり、一人ひとりに合わせた指導を通して成功に導くには、遊びに内在する運動学的、運動力学的理解が必要になる。しかし、授業や教科書から得た文字や図、写真を主体とした知識や技術では詳細に理解することは難しいことが多い。そこで、タブレット端末を用いて撮影したスローモーション映像や、3DCGを用いた人体解剖学のアプリ、動作分析アプリを活用し、運動遊びに内在する運動学的、運動力学的要素を理解できるようにしている。

・リアクションノートを用いた学び

子どものやる気を引き出し成功体験に導き自信につなげる保育を行うためには、活動中の心の動きを考えることが不可欠である。そこで、授業において学生自身が取り組んだ運動遊びにおいて、どのような感情が起きたのか、遊びが進むにつれてどのように変

化したのかをリアクションノートに記録するように指導している。さらに、自分以外の学生はどのような気持ちであったかも聞き、同じ遊びの中で生じる多様な感情を記録するように指導している。このように体験と感情を結びつけることで、運動遊びを計画する際に、どのような感情が生じ得るかを想像し、ねらいの達成に向けた工夫の足がかりになるようにしている。

授業では一斉指導となるため、理解度に個人差が生じる。そこで、リアクションノートに感想や質問を記入することを促し、個別に対応できるようにしている。

・実技試験、筆記試験を通した学び

実技試験は、運動遊びの模擬保育発表や指定した運動技術について、合否がかかる緊張感の中で自身のパフォーマンスを発揮できるかという課題として実施している。また、実技試験に臨む準備の過程として、どのような活動内容、運動課題なのか、どのようなコツがあるのかを説明し体験させ、合格するために必要な視点について理解を促している。

筆記試験では、授業内容について説明を求める問題を取り入れている。単に記憶の再現でなく、記憶したことを他社にわかりやすく説明する力の向上を目指すことで、保育活動をする際の説得力の向上をねらっている。

④教育の成果

・グループ活動を通した学びについて

学生からの直接の感想やリアクションノートによる感想では、ラーニング イン ティーチングについて、「人に説明することが苦手なので最初は嫌だなと思ったが、相手がかちゃんと聞いてくれたり、伝わらなかったことを聞き返してくれて理解してくれたりしてうれしかった。」「クラスの前になつての発表では、とても緊張したけれどもやってみていい経験になった、また挑戦してみたいと思った。」というものがあつた。模擬保育の発表に向けた計画、準備については、「仲間と協力してやることで色々な意見が出て参考になった。」「仲間が協力してくれたので、準備がスムーズだった。」というものがあつた。

・視聴覚教材を用いた学びについて

学生からの感想では、スローモーション映像を用いた説明では、「スローモーションで動きをゆっくり見ることができたので、コツがわかりやすかった。」「実際の運動では見えないところが見えて面白かった。」というものがあつた。3DCG を用いた説明では、「普通見ることができない体の中を見ることができ、体の作りや動きをわかりやすく見ることができた。」というものがあつた。動作解析アプリを用いた説明では、「目では分からない微妙な違いを、角度で見ることができてわかりやすかった。」「2つの動画を並べてみるので、違いがわかりやすかった。」というものがあつた。

・リアクションノートを用いた学びについて

学生からの感想では、「後から振り返ることができるので、実習で指導案を書くときに自分の気持ちまで振り返って計画することができ、役立った。」「自分のわからないことを直接先生に質問できて先生が答えをノートに書いてくれるのでうれしかった。」というものがあつた。

・実技試験、筆記試験を用いた学びについて

学生からの感想では、実技試験については「自信もなく緊張で逃げ出したくなつたが、合格することができ達成感が半端なかつた。」「仲間がアドバイスをくれたり練習に付き合ってくれたりして助けてもらった。仲間の大切さがわかつた。」というものがあつた。筆記試験では、「限られたスペースにわかりやすくまとめるのが難しかつた。」「頭でわかっているつもりでも、説明するとなると理解できてないということを思い知つた。」というものがあつた。

以上のことから、これらの方法を通して、「ただ覚えるではない理解を深めること。」「他者のから学びを得ること。」「感情の動きに気づくこと。」「他社にわかるように工夫しまとめ伝えること。」の理解を深められたと考えている。

これらの成果は、担当した学生全員に完全にもたらさえたとは言えないので、一人ひとりの学びの状況を把握し、より多くの学生がより良い成果を得られるように授業を改善していきたい。